

大仏供養

前

シテ 悪七兵衛景清

ツレ 景清母

後

ツレ 頼朝

同（数人） 従者

ワキ 同

シテ 前に同じ

地は 大和

季は 雑

「忘れは草の名に聞きて。く。忍ぶや我身なるらん。

「是は平家の侍悪七兵衛景清にて候。我此間は西国の方に候ひしが。宿願の子細あるにより。此程罷り上り清水に一七日参籠申して候。又承り候へば。南都大仏供養の由申し候。某も若草辺に母を一人持ちて候ふ程に。かやうの折節貴賤に紛れ。向顔の為め唯今南都へと急ぎ候。

「あはれや実に古へは。さしも栄えし花紅葉の。寿永の秋の如何なれば。思はぬ風に誘はれて。さしも馴れにし都の空。引きかへ鄙の憂き住居。

「繫がぬ船のかひもなく。弓矢の家に生まれ来て。

「三笠の森の陰頼む。く。其箒木のながらへて。いまだ此世の御住居。神も教への牡鹿鳴く。春日の里に着きにけり。く。

「急ぎ候ふ程に。南都若草辺に着きて候。此あたり

にて御行方を尋ねばやと存じ候。

母詞

「さても我子の景清は。此程何処に在るやらん。南無や三世の諸仏。我子の景清に。ふたゝび逢はせてたび給へ。

シテ詞

「如何に案内申し候。

母詞

「我子の声と聞くよりも。覚えず扨に立ち出でゝ。景清なるかと悦べば。

シテ

「暫く。あたりに人もや候ふらん。某が名をば仰せ

られまじいにて候。

母

「まづ此方へ渡り候へ。さて此程は何処に候ひつるぞ。

シテ

「さん候西国の方に候ひしが。宿願の子細有るにより。都に上り清水に参籠申し候ふ処に。大仏供養の由承り候ふ程に。かやうの折節貴賤に紛れ。御音信の為に参りて候。

母

「さてはうれしくも来り給ひて候。又尋ね申すべき

事の候ふ包まず申すべきか。

シテ「是は今めかしき仰せかな。何事にても候へ申し上げうずるにて候。

母「まことや人の申すは。頼朝をねらひ申すと聞き及びて候ふが誠に候ふか。

シテ「是は思ひもよらぬ仰せにて候ふさりながら。西海にて亡び給ひし御一門の。御弔ひにもなるべきかと。思へばねらひ申すなり。

母「申す処はさる事なれども。明日をも知らぬ老の身の。果をも見届け給へかし。

シテ「風にたゞよふ浮舟の。教経の御供申さずして。

母「物を思へば。

シテ「起きもせず。

地「寐もせで夜半を明かしかね。此身を隠すかひもなく。景清が心の内。母もあはれと思し召せ。一門の船の内。く。に。肩をならべ膝を組みて。所せ

く澄む月の。景清は誰よりも。御座舟になくて叶ふまじ。一類其以下。武略さまぐに多けれど。名を取楫の舟に乗せ。主従隔てなかりしは。さも羨まれたりし身の。麒麟も老いぬれば。駑馬にとるが如くなり。

シテ詞

「早夜の明けて候ふ程に御暇申し候。

母詞

「かまへて御身をよくく慎みて。重ねて来り給ふべし。

シテ

「実に有難き母の慈悲。御言葉の末も頼もしき。

地

「柞の森の雨露の。く。梢も濡らす我袖を。しをりかねたる涙かな。いつしか親心。悲しむ母の門送り。景清も跡を見返りて。涙と共に別れけり。

く。
(中入)

一同一声

「世に隠れなき大伽藍。仏の供養急ぐなり。

頼朝

「そもく是は源家の官軍。右大将頼朝とは我事なり。

「同」忝くも此御寺は。聖武皇帝の御建立。大仏殿にて
おはします。

ワキ「又此君の御威光。今此御寺に合ひにあふ。

「同」大伽藍の御供養。く。光りかゝやく春の日の。
三笠の山に影高き。法の御声のさまぐに。供養
をなすぞ有難き。く。

シテ一声「おもしろや奈良の都の時めきて。色々飾る物詣で。
我はそれには引きかへて。敵をうたん謀を。思ふ

心はおのが名の。悪七兵衛景清と。よそにもそれ
と人やもし。白張浄衣に立烏帽子。実に我ながら
思はざる。姿に今は檜の葉の。時雨降り置く天が
下に。身を隠すべき便なき。憂き身の果ぞあはれ
なる。

一声「宮人の。姿を暫し狩衣。

地「今日ばかりこそ翁さび。

シテ「人などがめそ神だにも。

地 「塵に交はる宮寺の。 供養の場に立ち出づる。

ワキ詞 「こは何者なれば御前まぢかく参るぞそのき候
へ。

シテ詞 「是は春日の宮づこなるが。 今日の仏の御供養。 場
を清めの役人なるを。 何しにとがめ給ふらん。

ワキ 「春日祭にあらばこそ。 是は仏の御供養。

シテ 「なふ水波の隔てと聞く時は。 仏も神も同一体。 其
上貴賤の事なるに。 何とて撰び給ふべき。

ワキ 「包むとすれど神はなほ。 君を守りの御威光。

シテ 「あらはれけるか白張の。

ワキ 「脇より見ゆる具足の金物。

シテ 「光りを放つ。

ワキ 「打物の。

地 「鞘つまりたる言葉の末。 名乗れくと責めければ。
頭はれたりと思ひつゝ。 さらぬやうにて立ち帰り。
又人かげに隠れけり。

「言語道断の事。唯今の者を如何なる者ぞと存じて候へば。平家の侍悪七兵衛景清にて候。正しく我君をねらひ申すと存じ候ふ程に。警固の者に申し付け討ち取らせばやと存じ候。如何にやいかに警固の兵たしかに聞け。唯今見えし痴者を。早打つ取つて参らせよと。さも高声に下知すれば。

「畏つて候ふとて。かねて用意の警固の兵。皆一同に立ち騒ぐ。

「其時景清又立ち出で、思ふやう。こゝ立ち退きては弓矢の恥辱となるべきなれば。今一太刀は打ちあひて。重ねて時節を待つべしと。大音上げて呼ばゝりけり。そもく是は平家の侍悪七兵衛景清と。

「名乗りもあへず痣丸を。く。するりと抜き持ち立ち向ひ。大勢に割つて入れば。さしも固めし警固なれども。四方へばつとぞ遁げにける。中に若

武者進み出で。走りかゝつてちやうと切れば。ひらりと飛んで手もとにより。忽ち勝負を見せにけり。今は景清是までなりと。少し祈念を致しつゝ。彼痣丸をさしかざせば。霧立ち隠すや春日山。茂みに飛び入り落ちけるが。又こそ時節を待つべけれど。虚空に声して失せにけり。